

人間の幸せを追求する経営理論

猛烈な利益追求姿勢で有名な米投資銀行ゴールドマン・サックスを3月付で退社した同社幹部社員が、同社に対する痛烈な批評を米ニューヨーク・タイムズ紙に寄稿したことが話題になった。その記事には、同社は顧客から平気でピンハネし、顧客の利益より自社の利益を優先するように社風が変わってしまったから退社したと書かれていた。ウォール街は、今や行き過ぎた強欲資本主義の象徴のようになっている。

米国では、1%の高所得階層の合計所得が全国民の所得の10%前後の割合となったとき、多くの中間層が生まれることにより、資本主義経済が正しい状態になるようだ。ところが、2008年9月にリーマン・ショックが起きた頃には、この割合が25%近くにまで膨らんでいた。所得階

知恵の経営

層のトップに所得が偏ってしまい、中間層が縮小してしまったのである。この結果、経済が良好な状態を保つことができなくなってしまった。

リーマン・ショック以前に同水準まで膨らんだのは、1928年の世界大恐慌のときだ。リーマン・ショック以降、行き過ぎた資本主義の見直しが始まっている。

会社は5人のために

そんななか、経営学も、今まさに日本発の見直しが始まったようだ。法政大学大学院の坂本光司教授の著書「日本でいちばん大切にしたい会社」（あさ出

アタックスグループ
主席コンサルタント
西浦道明



版)が56万部のベストセラーになり、続編の3冊目が発売され、社員の幸せを追求する経営学が一種の社会現象になっている。

従来の経営学は、利益追求が経営の目的であり、そのために競争力をいかに高めるかが最大の関心事だった。競争力の研究は極めて重要であり、それはそれで社会に素晴らしい功績があったと思う。経営者にもたくさんの知恵を与えてくれた。

しかし、坂本教授は「それも大切だが、そもそも会社の正しい存在目的はいったい何なのか、経営者の皆さんにはそのことを強く意識してほしい」と主

張する。さらに、こう助言している。「会社は5人のために存在し、5人に貢献しなければならぬ。5人とは、社員と社外社員、顧客、地域社会、そして株主であり、経営における重要度もまさにこの順番。したがって、大切な社員のリストを簡単にやっつけてはいけない。リストをしないで済むように常日頃から社員と強い絆を築く努力をすれば、結果として、会社の収益力を高く安定させることができるはずだ」

経産大臣賞にツムラ

この本の出版がきっかけとなり、一昨年、経済産業省により

アタックスグループ 顧客企業1700社、スタッフ170人の会計事務所兼総合コンサルティング会社。「社長の最良の相談相手」をモットーに、東京、名古屋、大阪、静岡でサービスを展開している。

「日本でいちばん大切にしたい会社大賞」が創設された。会社の存在目的に対する経営者の考えにブレがなく、社員に優しく社会的弱者にも優しい。その結果として、立派な経営成果を上げて称賛に値する企業経営者を表彰する制度で、今年が2年目だ。今回は、経済産業大臣賞にツムラ、中小企業庁長官賞には日本ウエスタンがそれぞれ選ばれた。

こうした社員や社会的弱者と強い絆を結ぶ企業が次から次へと輩出されることにより、行き過ぎた資本主義が正しい方向へ導かれていくことを期待したい。